

「修行」に潜む「落とし穴」

「行ずる」根本に「懺悔」が不可欠

荒行堂という修行現場を通して

正中山遠壽院荒行堂傳師 戸田 日晨

(1) 行堂改革と重なり
合うオウム問題

オウム真理教事件について私が述べられることは限りがありませんが、「荒行堂」という日蓮宗の僧の修行道場において、行僧時代から現在の「導師」職に至るまでの45年間の経験を踏まえて、「修行」という共通テーマを基に話してみたいと思います。

まず、遠壽院荒行堂における「寒百日荒行」の内容について簡単に説明すると、荒行堂に入行した加行僧(以下「行僧」)の日課は概ね次のような次第になります。

①「午前3時に始まり午後11時に至る迄の1日7度の水行」、②「水行時以外は読経堂における法華経誦誦三昧」、③原則「粥と味噌汁を主体とした1日2度の食事」

この行は発祥以来400年以上の歴史があり、毎年11月1日の入行で始まり、寒中百日間修されて

論

地下鉄サリン事件から25年

⑦



とだ・とし氏 1953年、東京生まれ。國學院大文学部哲学科卒。現在、正中山遠壽院荒行堂傳師、遠壽院総合修法研究所所長。

「他者を許容せず」に危惧

自己肥大化、「問題僧」に共通

が、現在私は「行堂改革」の方針で、荒行堂を巡る内外に亘る改革改善策を打ち出し、意識を同じくする方々と共に改革実践に取り組んでいます。

が、現在私は「行堂改革」の方針で、荒行堂を巡る内外に亘る改革改善策を打ち出し、意識を同じくする方々と共に改革実践に取り組んでいます。

な悪影響を及ぼす。その改善策を模索しながら進めている——という事です。

「行をする」というのは、世間的な思考概念から自身を解放することともいえます。また逆説的にありますが、「行をする」に至るまでの過程においては、「健全な思考生活」というものの深みある蓄積も、或る意味で基盤とならなければならぬと思います。

しかしながら、このような「人」としての精神構造の基底部分が欠落したまま年齢のみを重ねてしまった謂ゆる「問題僧」に共通していることは、「自己肥大化」した思考のみが優先され、決して「他者を許容する」ことが出

来ます。

オウム真理教に目を転ずれば、事件当時数々のメディア報道等で紹介された「修行」と称する様態は、例えば「ヘッドギア」、「水中クンパカ」などに象徴されるように、まるで「修行サーカス団」の様相を呈しており、尚且つメインドコントロールによって「この教団だけが正しいのだ」と信じ込まされているわけですから、この中からは美意識に基づいた「修行センス」などというものは、全く創造され得ないことだと思うので

「梨の礫」で通す研究者がいま話に少し逸れますが私共の宗門内においても百日荒行を称して、考えざるをえないという特徴があります。

また私は、世間的思考、知識、脳的なものを一旦頭から外して、「行」をするという行為の立脚点を考えます。表現の仕方としてはどうかと思いますが、自身の中に確固とした或る種の「美意識」を保つ必要がある、と常日頃感じていました。しかし、心のバランス感覚が閉ざされている行僧を鑑みると、全くといっていいほど「美的感性」とか、微細な感受性が育まれていないことを見出すことが

私は、荒行堂の門に入り「行」

(2) オウム真理教事件と宗教研究の世界

オウム真理教に関しては事件発生前から、謂ゆる「アカデミズム」の方々も色々な形で関わって来られたことを承知しています

が、事件発生後、最終的には「尻切れトンボ」で終わり、その後は一切関係が無かったかのよう

に、「自己の苦しみ哀しみと向き合い、それを超越して行く」ことの重要性を強く感じております。

合掌

オウム真理教に於いては事件発生前から、謂ゆる「アカデミズム」の方々も色々な形で関わって来られたことを承知しています

が、事件発生後、最終的には「尻切れトンボ」で終わり、その後は一切関係が無かったかのよう

に、「自己の苦しみ哀しみと向き合い、それを超越して行く」ことの重要性を強く感じております。

苦しみ・哀しみ 向き合うことが重要

(註1)「遠壽院流」『仏教宗派辞典』金岡秀友編(東京堂出版)

(註2)藤樹の言葉『代表的日本人』内村鑑三著、鈴木範久訳(岩波文庫)